



Veritas No.45(2010.12.21)

目次 (敬称略)

<国境を越えて—琉球人の世界認識と「地球儀」—>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 国境を越えて>

白井 由美子 (英文学科)

中野 敬一 (総合文化学科)

島崎 徹 (音楽学科)

須藤 春佳 (心理・行動科学科)

武中 桂 (環境・バイオサイエンス学科)

近藤 道子 (文学研究科比較文化学専攻)

<本の花束 —その5—>

竹中 園子 (図書館)

<研究室から>

三杉 圭子 (総合文化学科)

<史料室から>

佐伯 裕加恵 (史料室)

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 VII>

柏木 隆雄 (大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長)

無断転載を禁ず

<国境を越えてー琉球人の世界認識と「地球儀」>

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

大航海時代は、国境を越えるヒト、モノ、情報の動きが加速された時代である。17世紀以降、オランダ、イギリス、フランスはそれぞれ東インド会社を設立してアジアとの貿易を展開する。のちに産業革命をへて世界市場へと進出したイギリスでは、18世紀後半に蒸気機関の実用化や紡績機、力織機の発明が相次ぎ、工業化を促進した。やがてヨーロッパ列強の植民地はアジア、アフリカに広がり、19世紀末の大英帝国は世界の4分の1を支配するまでになる。

イギリス人が東アジアに進出した歴史的背景には中国との貿易があった。イギリス国内で「茶を飲む習慣」が定着した結果、中国からイギリスへの茶の輸出は飛躍的に拡大した。このため1780年代以降、イギリスとそのインド植民地経営にとって、中国貿易はいちじるしく重要性を増したのである。しかし、茶の輸入増大に見合うほどにはイギリス製品の輸出は伸びなかったため、イギリス政府は中国への輸出拡大のために積極的な対策を講ずる必要にせまられた。

そこで1792年に中国へ派遣されたのが、ジョージ・マカートニー使節団である。マカートニーに与えられた訓令の中には、中国との交渉とならんで「日本、交趾シナ（ベトナム）、および東洋の諸国と条約を結び、通商を開くこと」があげられていた。

◆ イギリス人と出会った琉球使節

1793年(清の乾隆58年)の晩秋のある日のこと、中国江南を流れる大運河の船上に、琉球からやって来た使節団の姿があった。かれらは北京へ朝貢に向かう旅の途中であったが、浙江省杭州の近くでイギリスのマカートニー卿らと偶然に出会う。その様子が、マカートニー著『中国訪問使節日記』(坂野正高訳)の11月18日条に記されている。

今夕、王大人が私の船へ二人の貴公子を連れて来て、北京へ赴く途中の琉球諸島の国王の使節であるとして私に紹介した。(中略)彼らは中国語を上手に話すが、自国語をも有している。それが日本語に近いか朝鮮語に近いのか、私にはよくわからなかった。彼らの話によると、ヨーロッパの船はまだ琉球諸島に寄港したことがないが、もし来航すれば歓迎されるであろう。外国との交際に対する禁令はない。首都からほど遠くない所に、どんな大きな船でも停泊させることのできる良い港がある。(中略)彼らは好男子で、顔のつやもますます色白といえる方であった。物腰も上品で、話はおもしろく、口数も少ないほうではなかった。(以下略)・・・

このようにマカートニーは、清朝の役人「王大人」の紹介によって琉球の使節たちと会

談したことを、その日記に印象深く書き留めている。かれは 1793 年 9 月に熱河の離宮で乾隆帝に謁見することに成功した。しかし、清朝側に求めた貿易交渉は拒絶され、空しく帰国した。マカートニー使節団の交渉が失敗したあと、1816 年イギリスは再び貿易制限撤廃を求めてアマースト卿を中国に派遣した。

このアマースト使節団に随行し、アマースト卿を中国に送り届けた後、朝鮮・琉球を訪れたのが、バイジル・ホール（1788 - 1844 年）である。父のサー・ジェイムス・ホールはスコットランドのエディンバラ生まれの名門貴族で、ケンブリッジ大学のクライスト・カレッジで学んだのち、フランスのブリエンヌの士官学校に入り、若き日のナポレオンと同学であった。ちなみに、ホールの孫で明治時代に来日した B.H チェンバレンは、草創期の東京帝国大学で言語学などを講じた著名な日本・琉球研究者として知られている。

◆「地球儀」を見た琉球人

さて、バイジル・ホールらを乗せたイギリス軍艦ライラ号とアスセスト号が琉球に寄港したのは、1816 年 9 月中旬のことである。9 月 22 日および 10 月 23 日には、琉球王府の高官たちがアルセスト号を訪問した。そのときの様子についてホールは、次のように記録している（バイジル・ホール著・春名 徹訳『朝鮮・琉球航海記』）。

（9 月 22 日）・・・老人は船室を歩きまわり、地球儀や書物や絵画を注意ぶかく調べはじめた。（中略）・・・マクスウェル艦長は地球儀を指し示して、老人にわれわれのたどってきた航路を理解させようと試みた。

（10 月 23 日）今朝早く、首長たちの代表が来艦し、国王につぐ地位にあり王位継承者でもあらせられる王子が、本日の午後、アルセスト号を訪問されるであろうと告げた。訪問の目的は、表敬およびマクスウェル艦長の見舞いであるという。（中略）・・・例によってわれわれの年齢や家族についての質問をはじめとする儀礼的な挨拶がおわると、王子は、この船のさまざまな珍しい品物について色々話を聞いているので、自分の目でそれを見たいものだ、といいながら立ち上がった。そして地球儀のそばへ行くと、注意深く観察し、インギリス・・・や琉球や広東（中国）、日本、マニラ、北京の位置を教えるように求めた。

この記事からわかるように、王子と称する琉球の高官がイギリス船を訪問し、船室にあった「地球儀」を見たのである。おそらく初めて眼にした「地球儀」を興味深げに観察したかれらは、中国の広東、北京、フィリピンのマニラ等の位置について質問しており、世界の地理情報に関心を示した様子がわかる。後日、王府からの贈物に対する返礼として、イギリス側から次のような品々が贈られた。ホール艦長からはブドウ酒、鏡、イギリスの人物画、地図帳、航海観測用の六分儀など。また、マクスウェル艦長からは小型の望遠鏡、

「ロンドンの地図」がプレゼントされた。この地図は彩色カラー刷りで、「周囲に王宮やグリニッジ病院やその他の公共の建物の絵が描きこまれているものである。王子は注意深くこれらの絵をみつめていた」という。

◆ 天文航海用の「六分儀」を見た琉球人

また、琉球の人びとはイギリス製の航海機器にも興味を示した。ホールの記録によれば、「六分儀」の望遠鏡に特に多くの関心が集まったという。これは、航海中に太陽・月・星の高度を測定する器械である。「ちょうど器械は台の上ののせてあったので、彼らの好奇心を満たしてやるには何の支障もなかった。角度も調整済みであったから、ただ彼らは望遠鏡の筒に目を押しつけさえすれば、よかった」（前掲書）。

「六分儀」の望遠鏡を覗いた琉球人たちの様子を観察したホールは、こう記している。多くの者は、シェードを変えたときに、反射像の色が変化するのを面白がっていたが、拡大率の大きなレンズを使っているために、望遠鏡を通して見たとき、二つの太陽の像が運行するさまが、はっきりとわかることの方にいっそう驚いている者もあった。自分たちが見たものの意味を理解しようと努めた者も二、三いたが、私の見るところでは、それを把握できたのは次良だけのようである」（同上）。

当時の多くの人びとにとって、こうした「望遠鏡」は初めて接する珍しい器械であったことがわかる。また、「地球儀」にも頭をひねった。1842年、琉球王府の役人が薩摩藩にあてた手紙には、地球儀のことを「手毬（てまり）」のような「丸物」と表現し、これは「天文地理」を見る道具だとイギリス人は申します、と解説を加えている。地球儀はたしかに丸いから、当たらずとも遠からず、といったところか。

◆ 幕末の日本人と地球儀

ところで、1840年にイギリスと清国との間にアヘン戦争が勃発し、東アジアに衝撃が走った。この戦争終結の翌年、1843年にはイギリス海軍のサマラング号が琉球海域に來航し、八重山諸島などを測量した。こうした異国船の到来に危機感を強めた水戸藩の徳川斉昭は、海外情報を集めて対策を練る一方、「地球儀」を作ることを命じ、三個の完成品のうちの一個は、1852年に朝廷に献上された。それはちょうど、ペリー艦隊が琉球の那覇をへて浦賀に來航した翌年のことである。

徳川斉昭と深い親交のあった薩摩藩主島津斉彬は、開明派大名として知られる。斉彬がいつも手元に置き、愛用していたといわれる「地球儀」が、鹿児島尚古集成館に現存している（写真）。1856（安政3）年ごろ江戸で作られた地球儀である。その地球儀は、斉彬が「世界の中の日本」を意識していたことを物語る。

世界を認識する便利な道具としての地球儀は、今日では小学生の子どもたちにも身近だが、その歴史をたどっていくと、意外に奥深い。地球儀をぐるぐる回転させると、「国境」を越えて世界を別の角度から眺めることができる。地球儀との出会いは誰も経験するよ

うに、異なる視点から「世界の中の日本」を意識することを教えてくれる。



島津斉彬所用とされる地球儀

(鹿児島尚古集成館所蔵 無断転載禁止)

参考文献： Basil Hall ;Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of
Corea, and the Great Loo-Choo Island .

バイジル・ホール著（春名 徹訳）『朝鮮・琉球航海記—1816 年アマーフト使節団とともに』岩波文庫、 1986 年。

<特集 国境を越えて>

白井 由美子 英文学科専任講師

図書館にまつわるエピソード

学生だった頃、まだインターネットも普及しておらず、エッセイ・論文を書くといえば「まずは図書館！」であった。高校までの考えで、論文も自分の感想や考えたことさえ書けばよいと思っていたのだが、そうではないということを大学の授業で知り、そこから図書館に行って本を探すという作業が始まった。

女学院の図書館は開架式で、その場で見えて選べるのでとても使い易かった。エッセイの宿題が出るたびに新図書館に通って『あれでもない』、『この本でもない』、『あっ、これこれ』などと色々と手に取って見ていたものである。

その時代は本の後ろにカードがあり、借りた人はそこに学生番号と名前を書いた。本とそのカードを図書館のカウンターに持って行くと、図書館の方が、今度は本に貼り付けて

ある用紙に、私が借りた日と返すべき日のスタンプを押して下さるのである。名前を書いたカードは返却時まで図書館の預かりとなる。これで貸し出しの準備完了である。

こんな作業ももう今では必要ないが、このカードを見て『あっ、〇〇先生も借りていらっしゃるから、この本を借りよう！』などと思ったものである。この分野がご専門の先生が借りていらっしゃるのだから、きっとよい本であろうと考えたのである。

そのカード。その時はただ名前を書いていただけなのだが、不思議なつながりをもたらしてくれた。この3月、ある先生のご退任記念パーティで一緒することとなった5、6年年下の卒業生。その方が言うには「私はいつも図書館の本の後ろのカードを見て、『また白井由美子という人が借りている。私もこの人のようにもっとたくさん本を借りて頑張らないと』と先輩のお名前を見つけては自分に発破をかけていました」とのことだった。卒業してから何十年。それまでずっと面識のなかった後輩と、このような形でつながっていたのかと思うと、驚きと同時になんだかくすぐったい気持ちになる。

今はこのようなことはもうなくなってしまったけれど、コンピュータ管理される前のちょっとした出来事である。

また、友達と授業で紹介されたロレンスの The White Peacock という作品がないか探しに行った時のことである。それは見つかったのだが、その時に「白孔雀」という日本語のタイトルの本もあったので、これも借りてみようということになった。古い本で書庫から出して来て頂いた。友達と読み始めると、どうも違う。よくよく見ると、作者も日本人である。「これ違う！」と図書館にいることを忘れて大笑いしてしまったが、女学院の図書館にはどんな本でもあるのだなあ、と思ったものである。

海外にも大きな図書館はたくさんある。学生時代、英国オックスフォードの語学学校に何度か通ったことがあるのだが、オックスフォード大学の Bodleian Library は英国で発行された図書が全て集まる図書館である。大学見学のツアーで見せて頂いたが、このような所でゆっくりと本が読めれば…と憧れてしまった。でも、女学院の旧図書館を思いおこさせる雰囲気でもあった。

私がオックスフォードに行くということを知ったハワイの知人が、自分の本を Bodleian Library に寄贈したいと言ってきた。たまたまホストファーザーのお兄様が大学にお勤めだったこともあり、図書館の方に話をつけて頂き、知人の本を持って図書館に伺うこととなった。当日は Bodleian Library の館長さんがお相手をして下さった。重厚な部屋に通され、その本について、また、日本について館長さんとお話した。憧れの図書館で思いがけない体験をした。その時の写真は、後に女学院の英文学科のHPに掲載された。

大学時代、図書館に足しげく通ったわけでもないのだが、カウンターのスタッフの方と顔見知りになった。卒業式当日、ご挨拶に伺うと、女学院の絵葉書を数枚下さった。

卒業後、英国スコットランドとウエールズに留学したのだが、その時には勿論その絵葉書を持って行った。残念ながらそれらの大学の図書館は近代的で、女学院や Bodleian Library のような雰囲気は味わえなかったが、大学時代に図書館で本の探し方、扱いなどを

知らず知らずの間に教えてもらっていたため、英国の図書館でも色々な本と出会うことができた。女学院の図書館に基礎を築いてもらったと感謝している。

中野 敬一 総合文化学科准教授

「国境」という言葉を聞いて最初に思いついたのは、日本から国境を越えて諸外国へ移住していった人々の物語です。「日系移民」に関心をもつようになったのは、15年前アメリカに滞在した時に始まります。当時私はカリフォルニア州サンフランシスコ近郊の町パークレーにある神学校で学びながら、近くの日系人キリスト教会で牧師をしていました。

その教会には、「一世」と呼ばれる日本からアメリカに移住した人々、その子どもたちで、アメリカに生まれ育った「二世」と呼ばれる人々、さらにその子どもたちの「三世」、「四世」がいました。他にも、アメリカで生まれた後、幼少期に日本で教育を受けてアメリカに帰ってきた「帰米二世」と呼ばれる人々や、戦後に移民として新しくアメリカにやって来た「新一世」とその家族もいました。

簡単に説明しますと、一世は、多くが日本で貧しい暮らしをしていたので、海外出稼ぎを目的にアメリカにやってきた人たちです。資金が無い彼らは懸命に働きました。例えば、荒地を開墾して畑を作り、農作業が終わると夜間に工場で働き、さらに空いている時間には内職して朝から晩まで働く毎日。しかも人種差別や英語が堪能ではないことで不当な扱いを受けながらも彼らは頑張り続けました。自分たちの生活費を、さらに自分たちが受けたような差別を体験させまいと、子どもへの教育費を必死に稼いだのです。日本に仕送りをしていた方もおられます。

しかし、太平洋戦争が勃発。日本軍による真珠湾攻撃を機に、西海岸に住む12万人の日系人は「敵性外国人」として、ユタやアリゾナ、コロラド州等に設けられた「強制収容所」に送られました。突然、彼らは築いてきた財産を失うことになったのです。荒地や砂漠にある粗末な建物、しかも鉄条網に囲まれて銃を向けられた監視付きの生活が三年続きました。

ところで、収容所に送られたのは、一世だけでなく、アメリカ生まれでアメリカの市民権を持つ二世も含まれていました。これは二世にとっては承服できないことでした。なぜアメリカ人である自分たちが日本人と同じ扱いを受け「敵性外国人」と呼ばれるのか？ そんな二世の思いがやがてアメリカ国軍への志願となり、一万人を超す志願兵が戦地に赴きました。彼らはアメリカへの愛国心を示すために必死に戦ってヨーロッパ戦線で大きな功績をあげたと称えられています。

さて、こんな短い紹介をしているだけでも、いかに多くの物語があるということが想像できるでしょう。移民の日常生活や、排日運動のこと、収容所での暮らしのこと、彼らが

戦後どうなったか、そして現在の状況など、ご紹介したいことは山ほどあります。さらに世代によって考え方の大きな違いがあることや、差別や戦時中の体験による独特な感情など実に興味深いものがあります。

私は教会だけでなく、アメリカの日系人コミュニティと関わりながら様々な意見を聞く機会を得ましたが、「国」とは何か、「日本人」とは何であろうか問い直すことになりました。同時に、日本におられる「在日」の人々に対する感情にも変化が生まれました。人種問題や差別について考えるときにも大いに参考にしています。

先日、TBS テレビで「99年の愛～JAPANESE AMERICANS」という番組が5夜連続で放送されました。ご覧になった方もおられるでしょう。興味を持たれた方は、本も開いてみてください。神戸女学院の図書館には日系移民に関する書籍が多く所蔵されています(三階です!)。日系移民の歴史や物語を知ることで、きっと新しい視点が与えられます。そして、本を読んだら、ロサンゼルスにある「全米日系人博物館」を訪ねてみることもお勧めします。

島崎 徹 音楽学科教授

国境を越えて

十八才で海外に出てから何度となく帰国はしたものの、約十二年間という月日を海外で過ごした。日本に生活の拠点を移してから、今の大学という場所での仕事に就くまではフリーランスで仕事をしていたので、頻りに海外へ出て行く生活をしていた。

振付家という仕事柄、一度仕事を受けると四週間から六週間程度はその国に滞在することになる。滞在期間が長いため、いつも相手となる舞踊団にリクエストするのは、ホテルではなくキッチンの付いたアパートを用意して欲しいということだ。日本ならまだしも、知らない土地で三食外食することを数週間も続けながら作品を創るストレスに耐えるというのは、私の場合かなり苦しい。

初日舞踊団へ行き朝のレッスンを見る。その後、全員を集めて少し自分の動きを試してもらったりしながらダンサーを選ぶのがまず初日の仕事、つまり料理に例えるなら、自分がこれから作るディッシュの材料選びというところだ。ところが大きな違いは何かというと、私の場合、この材料となるダンサーが感情を持った人間であるという点だ。しかもヨーロッパのそこそこ人数のいる舞踊団であれば、その人種の数たるやびっくりする程の人々が世界中から来ている。その様にして選ばれたアーティスト達と数週間毎日顔を合わ

せて一つの作品を創っていくというのが私の仕事である。私は当然選んだダンサー達に舞踊の技術というものを要求するが、彼らは一定の水準に達した技術をもっているからこそ、プロのダンサーとして認められ舞踊団に所属しているわけで、作品を創る過程に至っては、技術よりむしろその人間性や物事に対するその人なりの接し方、また作者が描いている世界に対し彼らが寄せる好奇心の度合などの方が大切になってくる気がする。しかし国内のダンサーに比べ海外、特にヨーロッパのダンサー達は、自分の目でしっかり振付家を品定めするところがあるので、振付家自身が逆に自分の人間性や物事に対する接し方などを問われる場面もしばしばだ。日本人よりも主張することに慣れている人々と一緒になって物を創っていく作業は、何にも替えがたい楽しみと同時に、自分をダウトする人間にとっては大きなストレスとなる。その日のリハーサルが終わり劇場の外へ出るとヨーロッパの古い街並み、暗い石畳の上を歩きながら、思うように進まなかったリハーサルのことを考え、ふと顔を上げると、数週間後に迫った公演の大きな広告に著名な振付家の名前と並んで自分の名前が浮かび上がる時などは「なんとかこの場から逃げ出せる方法はないものか」と本気で考えるものだ。そんなふうに自分が弱りかかった時に、私には必ずやることがある。料理だ。

ジュネーブにある劇場の仕事をした時は、中国人ダンサーと二人でカモを一羽買ってきて、針金でできたハンガーに吊して何度も刷毛で酢を塗って北京ダックを作ったし、ある著名なフランス人ダンサーとは、朝から車で国境を越えて市場へ行き、生ガキを箱で買って来て、ワインと一緒に楽しみながら一日中料理をした。オーストリア時代には、オーケストラにいた日本人の友人と豆腐や納豆を作ったり、ある日などは長崎チャンポンの麺をパスタを作る機械を利用して作ったりもした。知らない国のスーパーへ行き中をウロウロしているだけで、なんとなくそこで暮らす人々の様子が感じられたり、泊っているアパートの切れない包丁でキンピラを作るための人参を細く切っているだけで、なぜか気持ちが休まり平常心が蘇ってくる。大学に来てからは、私の海外の仕事についてくる学生達にも私の料理を幾度となく振る舞った。そうやって私の海外での生活ぶりを見た学生達が卒業し、留学した先から「先生のようになるべく毎日自分で料理するようにしてます」なんていうメールが届く。

昔若い頃に読んだ本に、自己変革を促すのに最も良いのは、非日常的な場所において日常的なことをすることだ、というようなことが書いてあったが、国境を越え、海外という非日常的な所で、まるで自分の国にいるのと変らず仕事を終え、スーパーへ行き、料理をし、洗濯をしてという日常的なことをくり返す。その中から見えてくるその国の姿の方が、観光名所から見えてくるそれよりも、私は好きだし信じられる気がする。

言葉を超えるものが国境を越えて伝わる時

現代は国際化の時代にあって、海外諸国の様々な情報が入ってくるが、実感として外国の人達を身近に感じるかどうかという問題は別ではないかと思う。国境を超えることは、昔に比べ、移動手段の発達とともに、物理的にはたやすくなったが、果たして心理的にもたやすくなっただろうか？ここで、私自身の体験に即して考えてみたい。

私が初めて海外の人と接触する機会をもったのは、小学校5年生の時であった。家族の都合で9カ月間、オーストラリアで生活をした際、現地校に入る前段階に英語を重点的に教育する公立小学校の中のクラスに所属し、様々な国の子どもたちと机を並べて勉強する機会をもった。東南アジア、ロシア、アフリカ、中近東、スイス、南米諸国から来た子どもたちがおり、世界には多くの国があり、各国特有の文化があるということを、同級生の服装や持ち物、お弁当のありようから肌身で感じる事ができた。このような体験が、世界の中の日本を感じる機会となった。隣国の韓国の少女からは、親世代の日本人に対する複雑な感情について教えられ、ロシア人の少年が柔道をしていて、忍者好きであるということも知った。

とはいえ、英語を殆ど話せない状態でクラスに参入した私は当初、周囲の人との意思疎通ができず、戸惑うことが多かった。そんな折に、自分を表現したり、他の子どもたちと意思疎通できる手段として、描画の存在が大きかった。当時、オーストラリア先住民であるアボリジニの芸術展が開かれており、学校から見学に行ったあと、アボリジナルアートを自分たちで再現する取り組みを行ったのである。アボリジニは文字をもたない民族で、壁画という形で彼らの精神世界を表現している。当時アボリジニの文化において語り継がれている「虹の大蛇(rainbow serpent)」をモチーフにした作品をクラス全員で完成させたのが印象深く、その大蛇の出てくる神話を学んだ。言葉にならない思いや内面世界を表現する芸術作品や、民族の伝統文化には魂が宿っており、それを見よう見まねで模写し、多様な国の子どもたちと共有した体験は、彼らとの間の心理的な壁を低くする上で大きかったように思う。

また、先日、国立民族学博物館で開催されていた、アフリカの現代彫刻家エル・アナツイという人の展示会に行った（『エル・アナツイのアフリカ』）。エル・アナツイは、アフリカ人の彫刻家で、空き瓶の蓋やラベルをつなぎ合わせ、優美でスケールの大きな織物を作り、今や世界的に著名な芸術家である。彼はアフリカの伝統文化と、西洋から輸入された製品(の廃材)とを見事に組み合わせ、独自の世界を展開していた。彼の作品からは、手作業でラベルをつなぎ合わせたアフリカ現地の人々のエネルギーや、作品全体から感じられるアフリカという土地に根付く生命力を感じさせられた。今や西洋文化の影響なしではなくなったアフリカ諸国だが、彼のアフリカ伝統文化を重んじ現代に生きる魂の躍動が、作品

を通して伝わってきた。作品に込められた魂は、国境を超えるのだと感じたもう一つのエピソードである。

このようなわけで、冒頭に提示した、「心理的に国境を超える」体験とは、外国に生きる人を肌身で感じて生じるもので、言葉でのコミュニケーションを介してだけではなく、言葉にならない魂の営みを感じることで生じるのではないかと思う。子どもの頃にオーストラリアで触れたアボリジナルアートを介した体験、そして最近触れたアフリカの芸術家の作品を通して、言葉を超えるものを「感じる」体験こそが、人の心に国境を超えさせるのではないかと考えた。

武中 桂 環境・バイオサイエンス学科特任助教

紅葉の季節の岡田山、煌びやかなイルミネーションが心を躍らせるクリスマスの岡田山、どちらも私が好きな女学院の顔です。私は、2000年から2004年まで学部時代の4年間を、神戸女学院大学人間科学部で過ごしました。その後、北海道大学大学院へ進学、修士課程・博士課程を修了し、2010年9月、約6年半ぶりに神戸女学院へと戻ってきました。

先に、私の専門について簡単にお話したいと思います。学部時代から私は「環境社会学」を専攻しており、とりわけ“地域社会における人と自然との関係”について“その土地における過去から現在までの暮らし”という側面から分析・考察しています。このように説明すると「学問らしく」聞こえるでしょうか。もちろん、大学院時代の指導教官、他大学の諸先生方、大学院時代の先輩たちをはじめ、私のまわりにはアカデミックに環境社会学を研究されている方々ばかりです。ですが、私の調査と言えば、地域に住む古老を訪ね、一緒にお茶を飲みながらお話をする、といったもので、いわゆる「調査」のイメージとは幾分か離れた感じがするかもしれません。と言っても決してサボっているわけではなく、そのようなありきたりな日常の語りこそが私の研究においては非常に貴重なデータとなります。特に、記述に残っていない実生活に基づいた過去から現在に至るまでの記憶を掘り起こすことは、楽しい作業ではありますが、人の語りがその時々で変化することも珍しくないため難しい作業でもあります。これまで私は、北海道札幌市近郊の野幌森林公園の周辺や、宮城県北上町の北上川河口地域、同じく宮城県田尻町の蕪栗沼周辺地域において、そのような聞き取り調査を行い、「自然－人間」関係について考えてきました。

一方で現在、神戸女学院において私が携わっているのは人間科学研究科のプロジェクトの1つ「地域からESDを推進する女性環境リーダー」の育成プログラムです。本プログラ

ムでは、アジア各国からの留学生と神戸女学院の大学院生が環境科学・人間行動学・バイオテクノロジーなどを学び、“持続可能な発展のための教育（Education for Sustainable Development）”を通して地域の環境リーダーとなることを目指しています。本プログラムが目指すのは、①地域に根差した課題を見つける能力、②幅広い視野から問題の解決を考える能力、③多くの人と協働して事に当たる能力、④地域のリーダー的役割を果たす能力、を身につけることであり、今年度は、2010年10月1日よりフィリピン、マレーシア、インドネシア、ベトナム、中国から計8名の留学生を迎え、12月現在、講義も含めプログラムは順調に進んでおります。特に、アジア諸国の大学とのインターネットを使ったライブ講義はとても画期的であり、日本人も含めて学生たちに好評です。また「インターンシップ」と題された講義においては、西宮市のNPO（LEAF）との連携のもとで様々なプログラムを進めており、留学生たちにとっては日本におけるNPOの運営や各所で実施されている環境活動のノウハウを学ぶための貴重な時間と場所になっています。

では一体、私自身の研究と、本ESDプログラムとの間には、どのような関係があるのでしょうか。「国境を越えて」と題された本特集においては、そこに触れる必要があるでしょう。たとえば、私がこれまで調査してきた地域において、人々が資源の「持続可能性」を念頭において生活を営んできたのか、ということ必ずしもそうではありません。雑な言い方になってしまいますが、要するに何気ない日常の営みの過程で“結果的に”資源管理がなされていた、というのがほとんどです。つまり、私の研究は「なぜ“結果的に”資源管理がうまくできていたのか？」を分析することであり、その部分についての詳細を1つの事例として報告すること、その分析（調査）方法を伝えることなどは、地域に根差した環境リーダーの育成に関して一定の意味を持つのではないだろうか、と考えています。もちろん各留学生の出身国にはそれぞれ異なった環境問題の事情があるので、そのすべてに精通するわけではありませんが、“生活者”という立場に立脚して環境問題を捉える、という視点は、日本国内外を問わず言わば「国境を越えて」考えるための1つのツールになるのではないのでしょうか。

今再びこの神戸女学院のキャンパスに立てることに感謝しつつ、また留学生たちの日本での生活、女学院でのキャンパスライフが実り多きものになるよう、私もより一層研究に邁進したいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

中国・内モンゴルを旅して ―地球温暖化防止と日中友好の森づくり―

今年10月、私は株式会社日本触媒という化学関連会社が企画した中華人民共和国自治区内モンゴルでの植林活動に参加した。

植林地である内モンゴル自治区の伊金雀洛旗(エジンホロキ)(旗は行政区を意味する)は、北京からおよそ800キロにあり内モンゴル南部陝西省と境を接し、黄河中流域に位置する。1950年代以降、大規模な開墾と過剰な放牧といった人為的要因による砂漠化が進行し、1973年以降緑化の取り組みが始まった。伊金雀洛旗人民政府と中国科学院蘭州砂漠研究所の協力で展開される植林事業や緑化活動に、近年日本触媒のような日本の企業も貢献しようという関心を寄せている。この活動が実際に行われている地域はゴビ砂漠の南方、毛烏素(モウス)砂漠の一角にあるオルドス高原にある。これまでの10年で1500haに木が植えられ、かつて5%しかなかった緑化率は現在32%になっている。

さて、私は最初このツアーの団長である夫からこの植林計画を聞いた時、辺境の地であり、これからも行く機会もないであろう内モンゴルに何となく興味を持った。海外に一緒にでかけるのは、夫婦それぞれの時間や行く目的がちがうこともあり、実にこの旅が新婚旅行以来となる。

2010年10月9日(土)午後1時50分、関西空港を離陸した飛行機は北京に3時間30分後に到着し、そこから私たちは国内便に乗り換え1時間20分後に包頭(パオトウ)空港に到着した。この時、私は初めて内モンゴルという地に足を踏みしめた。

モンゴルというと次の一文を思い浮かべる。「チンギスカンの末裔、騎馬遊牧民、果てしなく広がる緑の大草原、草食五畜の群れたち、点在する白いゲル(包パオ)などをまっさきに思い浮かべ、そこにいくばくかの憧れすらいだくにちがいない。」(一ノ瀬恵『モンゴルに暮らす』)これがまさに私の抱いていたモンゴルに対するイメージであった。現地の植林地、伊金雀洛はモンゴル語で「皇帝の陵」という意味で、モンゴルの英雄、成吉思汗(ジンギスカン)と彼の率いた騎馬隊が駆け抜けたところである。私たちが内モンゴルで最初に訪れたのが、はるかに地平を望む成吉思汗の広大な陵であった。私は12~13世紀、世界制覇に夢を馳せた騎馬民族の地に立ち、ある種の感慨を覚えた。

しかし、今や内モンゴルは中国自治区となり漢民族が多くを占め、さらに遊牧民は定住化した牧畜や農業へと生活スタイルも変化を余儀なくされる時代である。モンゴルに対する想像がもはや過去のものとなっていることは、確かな現実であった。私たちの旅の拠点となる包頭は古い市街と新しい区域に分かれ、後者の方は奇抜なデザインの公共施設が街に林立する。同時に高層の新興住宅建設ラッシュが進んでいるところでもある。ここは石炭や今注目されるレアアース(希土)の産地として知られる。行き交うトラックに積み込まれた大きな石炭の塊や希土研究所の看板からこの土地の産業基盤がわかる。包頭についた次

の日、バスに乗りまず目に入ったのは、赤土の平原に一直線に伸びた両側 6 車線の道路が整備されているインフラ網である。さらに高速道路の両側に立つすべての照明燈のポールには太陽光パネルと風力発電装置が設置され、その先進ぶりに唖然としてしまった。こうした現実と私の予想との落差は大きかった。

さて、肝心の緑化活動の話に移りたいと思う。内モンゴル自治区にある日本触媒の植林地は、首都フフホトから 100 キロ離れた包頭から、さらにバスで一時間の伊金雀洛旗にある。降水量が少なく砂漠や樹木の乏しい草原に、障子松という耐乾性の強い木を 100 本植えるというのが、この植林ツアーの大きな目的である。日中友好の森に当てられた雀洛林場は約 50ha で、その内私たちが受け持つ面積は約 14ha である。

いよいよバスから降りて林場に足を踏み入れる時が来た。このチームの構成員はツアーに応募した会社関係者とその家族、そして緑化推進活動の専門家から成り、20 代の若者から数年前に現役をリタイアした 60 代まで、総勢 32 人が参加した。現地では内モンゴル大学の郝教授と同大学の日本語学科で学ぶ大学生 4 人も合流し、賑やかな集団となった。

植林作業の手順について説明があり、持ってきた軍手をはめると、いよいよ植林活動の開始だ。赤い砂にシャベルを突き刺すとその先端が思ったより楽に入っていくのが印象的だった。直径約 1m、深さは膝がすっぽり入るほどの大きな穴に、トラクターで運ばれてきた 5 年の松苗木を入れ、その根元に砂を戻し、周りを囲むように土手を作ってその中にバケツリレーで 5 杯の水を運び入れる。ここでは何をするのも皆が一つになって共同作業、連携行動をとらなければ一本の木がちゃんと植えられない。日本でやっている庭仕事とは全く別の労働である。いつしか互いに声をかけ合いながらできたチームワークと、手探りの試行錯誤で協力する。これが苗木の列を増やし、大地と向き合い、この砂地を林に変えようとする作業なのだ。砂と汗にまみれた参加者の顔は最後の一本に水を注ぎ終わると、紛れもない満足感にあふれ、互いに笑いながらねぎらい合っていた。去年植えられた木は 9 割が順調に育ち 60cm も伸び、その前年の木は去年より 30cm 大きく成長している。ここでは植物の生育は早くはないようだが、17 年前に植えられた木はもう見上げるほどの高木になっている。少しずつ緑の面積が広がって行くのを目の当たりにすると、こうした地道な活動の意義を実感する。最後に現地に建てられた会社の活動記念碑を囲んで写真を撮り、二日間にわたる私たちの内モンゴルにおける植林活動は終わった。

内モンゴルでの滞在には先ほどの郝先生や学生が便宜を図ってくれた。お陰で中国北部の現在の様子を垣間見ることができたことは幸せであった。そして、それ以上に彼らとの交流はこの旅を予想以上に楽しくさせてくれたと思っている。学生たちは日本の歴史や文化を学ぶことには非常に熱心だ。郝先生の緑化運動や日中交流のための率先的な行動力の影響も大きいと思われるが、緑化運動で行動を共にしてきた学生たちとの会話で伝わってくることは、彼らの将来にかける夢は半端ではないということだ。中国が実施している驚異的な近代化の一端は学生たちの意気込みの原動力をも生んでいるのだ。

漢字とモンゴル語が併記されたレストランや商店の看板が軒を連ねていた。観光客のた

めの店はほとんどないが、学生たちが連れて行ってくれた店には山羊の乳でつくったチーズや飴、そして羊の皮で作った袋や人形など、モンゴルならではの商品が並んでいた。この地域に脈々と受け継がれてきた伝統的な遊牧民の持ち味が、今も人々の生活を支え、彼らの生活に息づいているのだと気づく。フフホトにある内モンゴル大学のキャンパスで知り合ったモンゴル族の女子学生ウリリグさんは、この夏に撮った3枚の写真をメールに添付して送ってくれた。そこには包の中で楽しく遊ぶ民族衣装の女の子や、遠景に包が並ぶ大草原、そして馬が草を食む雄大な景色が写っていた。彼女はまだそんな生活を知っているのだという。

このように短い間ではあったが、さまざまな内モンゴルの様子を見、そこに住む人々の生活ぶりに接することができた旅であった。モンゴルを知ったなどとは言えないが、未知なる土地に対する興味を広げるのには十分な経験であったと思う。いつか植えた木がどんなに大きくなっているのかを見るために、もう一度あの地に行きたいと思う。行動を共にし、大変お世話になった大学生の孫さん、韓さん、趙さん、智さんにお礼を言いたい。こうして出会った人たちとまた一緒に時を過ごしたい。今度は私が彼らのために何か役に立てればと思う。



筆者は前列右から二番目

＜本の花束 ーその5ー＞

竹中 園子 図書館職員

12月も初旬を過ぎると、あれほど色鮮やかで美しかった紅葉もすっかり葉が落ちてしまい、冬枯れの静かな世界へと変わっていきます。

春夏秋冬をあらわすのに「山笑う」・「山滴(したた)る」・「山装う」・「山眠る」という季語がありますが、正門をめぐり岡田山を登って行くとおのずと豊かな自然が目に入り、この季語の世界を体感することができます。この時期「山眠る」、深(しん)とした世界を楽しみつつ丘に登りきると、そこは一転してクリスマスを祝う華やいだ雰囲気にも包まれています。

校舎のいたるところに真っ赤なポインセチアが置かれ、講堂には赤や緑や金の飾りのついたツリーやリースが飾られ、夜はイルミネーションが輝きます。

そのような中、図書館では来年のホームページのリニューアルに向け、館員が頭をつき合わせて作業に当たっています。皆さんが利用しやすく、必要な情報により簡単にたどり着けるよう、外部データベースのコーナーも一新します。

公開は来年2月を予定しています。皆様どうぞご期待下さい。



(正面：図書館本館)

(撮影：吉永真理子)

<研究室から>

三杉 圭子 総合文化学科教授

私はアメリカ文学を研究しています。ユダヤ系作家をはじめとする民族的少数派の作家、ジェンダーにおけるマイノリティの女性作家などを中心に現代アメリカ小説を読んできました。今は少し目先を変えて、20世紀前半に斬新な語りの手法を駆使したポルトガル系のジョン・ドス・パソスという作家の作品を研究しています。

高校生でアメリカに1年留学した後本学の英文学科で学び、文学研究はアメリカ研究のひとつのアプローチであると考えて大学院に進みました。文学そのものに深い関心を寄せるようになったのは大学院生になってからでした。最初に興味を持ったのは、ユダヤ系アメリカ人の作家達でした。白人のイギリス系プロテスタントの人々が主流を占めるアメリカ社会で、東ヨーロッパからやってきたユダヤ系移民の子孫たちは、アメリカ生まれであるにもかかわらず、自分が所属するコミュニティにおいて何らかの疎外感を抱えていました。彼らの作品には、人生において何かしら居心地の悪さを携えた主人公たちが描かれていました。私はアジアの片隅で彼らの小説を読み、その落ち着いた悪さにある種の共感を持ったのです。それは、バブル景気の日本社会で文学研究を志すことから生まれた周囲との隔絶感であるとか、母語ではない言葉で書かれた小説を研究しようとする心もとなさであるとか、独りで作品や批評と向き合う孤独感であるとか、たんに将来がはっきりと見えないことへの不安感であるとか、いろいろな要素が入り混じっていたのだと思います。

このように書くと、アメリカ文学を研究すること自体が、疎外感の原因なのであれば、それをやめればどこかほかに居場所を見つけられたのではないかという考え方もあるのですが、その実、そのような出口のない思考に風穴を開けてくれたのも、ほかならぬアメリカ文学研究でした。それは、時空や民族性や時には性差を超えて、ものを考えることの喜びや、知ることにの高揚感を与えてくれました。おそらく、母語で書かれた小説を読むときは異なった作品との距離感が、アメリカ文学研究をより知的な営みとして実践することを可能にしていたように思います。

文学への親しみは皮膚感覚に近いものに端を発していたものの、私の研究手法は、実証性と論理性を重んじる大学院でのトレーニングによって形成されました。文学研究は、そもそも何が謎なのかを探ることから始める謎解きのようなもので、答えを探すことよりは問題を設定することの方が大切だということ、おそらく多くの知的探求に共通の命題に支配されています。時には、何が書かれているかではなく、何が書かれていないかに注目して、なぜそれが書かれなかったのかを考えることになります。そして謎解きには、歴史的・社会的要因や、政治的・経済的動向、あるいは批評理論など、いろいろな道具を用いることができます。近年、どうも便利な道具がたくさんありすぎて目移りしてしまいそうになりますが、迷った時は必ず作品そのものと向き合うことにしています。そうすれば、作品は

いつも必ず何かを語ってくれます。

文学研究をする人がいなくても、文学は常に人間の生活の一部であり続けると思いますが、作品の新しい読み方や魅力を発見することで、文学の愉しみをより深めたいと思っています。

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院岡田山キャンパスに込められた思い（2）

— 『新築記念帖』 —

2010年10月12日に創立135年を迎えた神戸女学院。岡田山キャンパスに移転して77年目になりました。「日本一美しい女子大」と某テレビで評されたキャンパスはヴォーリス（William Merrell Vories）氏の傑作で、2009年10月に国の有形登録文化財の指定を受けました。

依頼主の神戸女学院（当時の院長デフォレスト先生 Charlotte Burgis DeForest）の教育理念と施工者のヴォーリス氏の設計理念が見事に一致して作り出されたこのすばらしい空間には、国内外の有名無名の様々な人々の思いと祈りが込められています。（デフォレスト先生とヴォーリス氏の思いについては、2009年12月21日発行のVeritas第42号をご覧ください。）

ところで皆さんは、岡田山キャンパス移転を記念して作られた冊子があることをご存知でしょうか。『神戸女学院新築記念帖』（神戸女学院、1934年）— 英文、和文の2種があります。この冊子は、単に新キャンパスの建物の解説をしているだけではありません。キャンパス移転に携わった人々の思いと祈りを記念して、感謝の意を込めて作られたものなのです。

本の中を少し見てみましょう。表紙を開けた扉のページには次のように記されています。

「後世の為に 奉仕せむとの幻想を以て 資材の物質たると精神たるとを問はず 寄贈の多少と記名の有無とに関らず 過去現在に

巨り神戸女学院に 喜捨せられたる各位に 此の記念帖を捧げて 満腔の謝意を表す」
(旧字体は新字体に直している) と。

金銭的な支援だけではなく、精神的な支え(祈り)の大きかったことも覚えられています。

ページをめくると「献堂式讚美歌」があります。これは設計者ヴォーリス氏自身が作詞作曲したものです。目次、「落成式の歌」(同窓生の作)と続いて、序文があり、「日本に於ける募金運動概略」が記されています。

キャンパス移転にあたっては、同窓会(現・めぐみ会)が尽力してくれました。神戸女学院の同窓会は、当然のことですが、女性ばかりの団体です。戦前、今ほど女性の社会進出は進んでいませんでした。家庭に入った人も多くいました。こうした人々が自分の後輩のために募金活動を行なったのです。岡田山移転を決める前に候補地となった明石大蔵谷。この土地を購入したのは同窓会でした。最終的に移転地が岡田山に決まったとき、同窓会は大蔵谷の土地を売ってその金額を全額学院に寄附。このおかげで岡田山の土地の大部分が得られたのです。

そして「米国に於ける募金運動概略」。アメリカで募金運動が始まったのは1920年、デフォレスト先生が帰米中にキャンパス移転のための援助を求めたのが始まりです。これがきっかけとなって、現在も続いているアメリカの神戸女学院支援団体 Kobe College Corporation (KCC、現・KCC - JEE) が出来ました。当時としては巨額の70万ドルというお金が募金によって集められました。

しかし、ここで知ってもらいたいと思うのは、お金の額ではありません。神戸女学院の移転計画は1920年から始まり、1933年に完了します。その間、アメリカで、いえ、世界で何が起こっていたのか。そうです、1929年金融恐慌が起こりました。ここ数年、かつての恐慌とそっくりなこと(リーマンショック以降の世界同時株安、円高、失業者の増加といった状況)が起こっていることは、皆さんの記憶に新しいところです。皆、自分たちの生活で大変だった時期に、見ず知らずの日本の女子学生のためにお金を捧げてくれた人々がいたということなのです。

『新築記念帖』に登場する建物や教室には、一つ一つ名前が附されています。物心両面の支えを感謝して、〇〇号室は〇〇さん記念の部屋という風に…。キャンパスのいろいろなところにドラマがあります。皆さんが毎日授業を受けている教室にも名前があるかもしれませんよ。皆さんも小さなドラマの目撃者になってみませんか。『新築記念帖』日本語版は岡田山キャンパス移転50周年を記念して覆刻され、その後に出来た建物の解説も加えて『岡田山の50年』(神戸女学院、1983年)として出版されています。図書館に入っていますので、興味を持たれた方は是非ご覧ください。(下に請求番号を記しておきます。)

* 『神戸女学院新築記念帖』（和文）請求番号：374.75 / KO1 、 374.75 / KO1 / C.2,4,5,7~10

Handbook of Memorials and commemorative gifts in the new Kobe College plant at Nishinomiya, Japan. (『神戸女学院新築記

念帖』英文) 請求番号：374.75 / KO1 / C.4~6

『岡田山の五十年』請求番号：374.75 / KO1BA / C.3~10

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 VII—クリュブ・ド・ロネットンム版
『バルザック全集』全28巻（1955年）をめぐって—（その1）>

柏木 隆雄 元神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授
現在大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

1. 古書の装丁

神戸女学院大学図書館架蔵の Les Œuvres complètes d'Honoré de Balzac, éd. Houssiaux 全20巻について3回にわたって取り上げた。あるいは書庫からその話題の全集の一冊でも借り出して、手にとつての感触を確かめてみた人もいてくれれば良いと思っているが、さて実際については図書館の人に尋ねずにいる。iPad で指をなぞるだけでページが繰られて、好きな本が読める時代、カビ臭い古本のページを繰る作業は、いよいよ銅版画の世界の中に閉じ込められてしまうのだろうか。しかし革装の古書には何とも言えない、手触りと匂いがある、19世紀の昔の読書人の気分になるのは、なかなか捨てがたい味わいがある。

古書蒐集家の残した本がパリのオークションで競りにかかる、そのカタログを見ると、質実な中に上品な金文字にタイトルが付された名著もあり、実に豪華絢爛、著名画家や、有名な装丁家になるものも写真入りで出ていて、暫しもの欲しげな顔でうち眺めることになる。(図版参照1 左：1944年刊『ボナール書簡集』、右：ドガ挿画 モーパッサン『メゾン・テリエ』1934年刊) とりわけ20世紀に出版された豪華本の装丁は、それだけで美術品的価値があって、中身よりも装丁のゆえにうんと値が張る。とはいうものの、あまりに奇抜、モダンすぎて到底わが陋屋の書棚には似合いそうにない。私はどちらかと言う

と背革で、表紙の上下の角がそれぞれ三角形に角革が施され、背には金箔押しで文字と五本のネールといわれる綴じ緒が浮き出し、マーブルが見返しと見返しの遊びの紙にきれいな色彩の渦を描いているのを好む。(図版参照2 左上：1868年刊『両王政復古史』、右上：同見返し) このマーブルも時代によって変化があり、18世紀のおおまかな、色の薄いのもいいが、19世紀後半の豪華で繊細なマーブル模様がつやつやの紙の下にかがやいているのも好きだ。そして天(あたま)と小口にもマーブル模様が施されていると、技法の精妙に感嘆の声をあげる。もちろん天金として天、あるいは天、小口に金が押されているのも豪華だ。



図2：マーブル紙の表紙 図2：マーブル紙の見返し

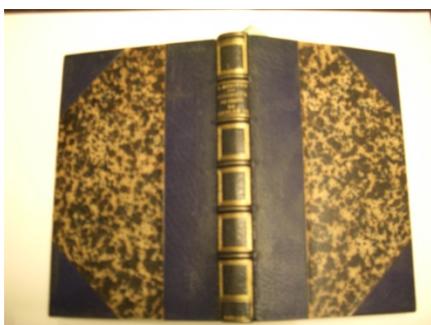


図2：メリメ『シャルル9世代』初版1829年刊

およそこうした革装丁の革の状態や、装丁の仕方で出版された、というか造本の時代がわかる。16世紀から17世紀にかけては全面白い仔牛の革装にゴシックの文字で黒くタ

イトルなどが印字されていたり、これも表紙全体が革装ながら、豪華な金箔の模様がネールを中心に美しい花模様、モザイク模様で飾っているものもある。18世紀の本はそうした装丁がより技巧的に、また繊細にもなって、19世紀は豪華さを誇るよりもデザイン性に優れ、堅牢さも増し、質実剛健といった体裁の中にも趣味の良さをのぞかせている。とくに個人全集などが19世紀前半から沢山出版されたから、それらを購入した富裕の人たちが自分の好みのデザインで装丁させた本がずらりと20冊も30冊も書棚に並ぶとなかなか豪華で、ちょっと昔の王侯気分が味わえるというわけだ。(図版参照3)もっとも19世

図3：左 スカロン『戯作ヴェルギリウス』1655年刊
中央 ダンテ『神曲 地獄編』仏訳 1775年刊
右 ユゴー『エルナニ』初版1830年刊

紀前半にイギリスでクロス装の技術と大量製本の技術が確立され、英米では出版社がクロス装の本として刊行することが多くなったが、フランスでは20世紀にいたっても相変わらず仮綴じ本として出されたのを、所有者が装丁する習慣が残った。

私が勤務する放送大学大阪学習センターの所長室には、自宅に入りきれなくなった書籍を並べているが、たまたま入室した学生で「ハリーポッターの部屋」と仇名したものがある。ハリーポッターの映画はまだ見たことはないが、おそらく壁一面に革装丁の本が並んでいるのだろう。ヘプバーン主演の『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授の書齋も何段もある書棚に圧倒するくらいずたかく本が積まれていた。まさかそれほど驚くほどの本を私自身が並べているわけではないが、わが家を訪れた建築家から、お宅は高い壁紙を使っていますなあ、と笑われてしまった。まさしく高価な壁紙である。

もっとも必ずしも装丁本が一番、というわけではない。本来頁の切っていない仮綴じ本を所有者が好みに応じて装丁するのだが(かつてある劇作家の全集を買い、さらにのちになって別の作家の全集を手に入れたが、その装丁が同じで、蔵書票も同じだった。おそらく最初の持ち主の書齋か書庫にあったものが、その死後別れ別れになって、別々に売られ、流転を経て、それこそ偶然に私の貧弱な書棚に収まってまた同じ屋根の下の「高価な壁紙」と化したのだった。)、その際、もとの表紙も背も皆切り取る場合が多いのだが、愛書家はそれをそれぞれ丁寧に残す。オリジナルの背が薄く別に貼り付けてあり、表紙や見返しも、さらには裏表紙にもオリジナルのものをきれいに残してあるものが多い。(図版参照4 シャンピオン版『スタンダール全集』1924年刊 原裏表紙と背)たとえば1830年、フランス文壇を騒がせたユゴーの戯曲『エルナニ』をたまたまパリのオークションで手に入れたが、それは華麗なロマンチック装丁の表紙を開くとちゃんとオリジナルの仮綴じ本の表紙や背が残されており、裏表紙に、近刊予告が印刷されていて、バルザックの『私生活情景』が同じ書店から売り出されることが記されているなど(図版参照5 ユゴー『エルナニ』初版

1830年刊裏表紙)、貴重な情報となることがある。まあたとえ情報とならずとも、そのあたりを勉強しているものには、何かバルザックやユゴーが身近に感じられるのが、そうした装丁の功德というものである。

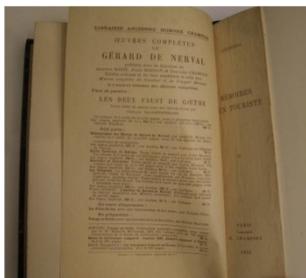


図4



図5



図6

その意味で装丁こそしていないが、私が二年前にパリで買ったフルヌ版『人間喜劇』全17巻はまことに貴重なものであった。というのも硫酸紙で丁寧に各冊カバーしてあったが、バルザック生前の発行のままに、仮綴じで頁もほとんど切っていなかったから、初版当時の姿をそのまま保存しているという点で、変に豪華に装丁してあるよりもかえって貴重なのだった。(図版参照6 フルヌ版バルザック『人間喜劇』全17巻1842~47年刊)

2. 仮綴じ本フルヌ版『人間喜劇』全17巻との出会い

この本を見つけた時の話は、ちらとこの連載の第2回に触れたことがあり、第6回にもフルヌ版『人間喜劇』について述べた際にも、またこの全集については後に述べると書いていたことを思い出される人もあるかもしれないが、もう少し詳しく書いておこう。

ちょうど3年前の夏、パリに10日ほど出かけることがあって、宿は家内の友人の計らいで、エコール・デ・ボーザールの客員教員用の宿舍の一室を借りることができ、そこを根城にあちこち動き回ったが、宿舍は日常の出入り口は6区のヴォルテール河岸に面して、学校の正式の門はボナパルト通りに面している。ボナパルト通りはしたがって、外出のほとんどの場合に往来する道となった。正門から出てその通りを数十メートルほども行ったところに高そうな古書店が一軒あり、それは実は何年も前から通りすぎる時、いつも気になっている本屋だったが、ガラスの陳列台にナポレオンの筆跡をとどめた手紙や、往年の貴婦人が弄んだであろう七宝に宝石を縁取ったブローチなども飾っていて、とてもドアを開けて中に入る気持にはなれなかった。しかしその時はたまたま誰かとの待ち合わせの時間に多少余裕があったので、その本屋にではなく、道路を隔てた斜め前にも古本屋があり、それほど高価とも思えぬような本も飾ってあるので、そこを冷やかすことにした。(大昔の学生の頃から、私は出入りする古本屋の主人や番頭さんと仲良くなる運の良さを自慢にしてきたが、以前にも書いたことがあるように(『人とともに 本とともに』所収「水鳥荘文

庫目録序文」参照) 千日前の天牛新一郎書店には足しげく通った成果か、地下の未整理の本が所狭しと山積みされている中を自由に行き来するのを許され、めぼしいものを抜き出しては帳場に持って行って、大いに得意だった。) その古本屋にある本も、やはりどれもそれなりの値段がついて、ちょっと買おうという気が起らなかったが、例によって? 売り場の奥の片隅に行くと、ガラスの入った棚の中に白い硫酸紙でカバーされた本が幾冊もある。のぞいてみると、これが1843年刊のフルヌ版『人間喜劇』全17巻の仮綴じ本、すなわち刊行時のままの姿で並んでいたのだ。ちょっと見て良いかという、見るのはいいけれどそれは未整理のもので、売り物ではないとの答えだった。開いて見れば見るほど、少し背が崩れているのもあるが、シミもなく、とりわけ挿入された挿絵の木口版画の状態の素晴らしいこと。私は未整理ならば、通常よりも安く交渉できると、われながら浅ましい、卑しい考えを起こして、買うとしていくらくらい出せば良いかと尋ねると、パトロンが今外出しているので、値段はわからない、あと数時間で戻るから、直接尋ねたらどうかという返事だった。パトロンは何度も前を通過して高そうな店と思っていた道路の向かいの古書店のオーナーで、この店も彼のものだったのだ。

用を先にすませて数時間後、再び本来のパトロンの店の方を訪れると、相当の年輩だが、白髪で悠然とした恰幅の良い紳士が笑顔で迎えてくれた。ネクタイはエルメス、上等の背広の袖からのぞく時計は金のローレックス、カフスボタンも上等だ。話してみると私の知人で亡くなってしまった古書店主たちも知っている。それも道理で彼こそは有名な古書連盟の会長を務めていたピノー氏だった。(年齢からしても彼はとっくに隠退しているはずだ。いわば道楽で仕事をしているのだろう。) 彼はその本は未整理のものだが必要なら売っても良い、という。いくらかと尋ねると、未整理で値段が付いていないのにも関わらず案外高いことを言った。日ごろ高言している値切りの腕のみせどころと、値段の交渉を始めたが、相手はいっかな聴きそうにない。

前にも書いたとおり、この全集は1843年から1847年まで刊行されたバルザック生前最後の『人間喜劇』集大成版である。しかも彼はその時点でなおさらに執筆作品の構想を新たに起こし、すでに新聞や雑誌に連載を重ねていた。彼の死後に残された彼所有のフルヌ版には、膨大な書きこみがされていてバルザックが増補版での再構成続刊を期していたことが分かる。前回3回にわたって紹介してきた神戸女学院大学所蔵のウシオー版『バルザック全集』全20巻は、このフルヌ版全17巻をそっくり復刊し、バルザック死後の5年後フルヌ版収録以後の作品と『風流滑稽譚』を収めた3巻を増補して『全集』と銘打ったものだ。たしかに平常のオークション価格で、装丁本で相当な値段であることは確かだった。しかもこの本は装丁のしていない、文字通り初版である。うーん、と唸ってばかりいた。

私はピノー氏に向かって、それほど高いものなら、日ごろ何も買ってやれない妻にカルティエのダイヤモンドを買う方がまだ、とうそぶいて、買うことに関心がないように装った。しかし百戦錬磨の古書店主にそのあたりの虚実が見えぬわけがない。彼はにやりと

笑うと、「ムッシュー、カルティエのダイヤは買うときは目をむくばかりだが、売る時はうんと値が下がるものですよ。」とまるでバルザックの小説の常連の骨董好きのユダヤ人の金貸しエリ・マギスのようなことを言う。「それに比べてこうしたフランス19世紀の小説、詩の初版本は、日本の愛好家や図書館がどんどん買いこんで、品薄になって、市場から姿を消し、ますます値上がりしていく。そう考えるとこの本などは今買っておかれたら、それこそ・・・」「なるほど、そういえばフロベールの『マダム・ボヴァリー』の1856年の初版はずいぶん高くなりましたからね」とつい相手に追従を言うようになってしまった。その『マダム・ボヴァリー』の初版もありますよ、と奥から大事そうに12折りの本2冊を取りだしてくる周到さ。1856年の初版でも2通りあるんです、これは文字通りの初版、素晴らしいものです、というのが彼の口上だった。これ以上話しているとどうということになるかわからない。私はカルティエのダイヤを身につけるはずの家内を促して、昂然と店を出た。

それから数日、いよいよ明日は帰国という日に、あれこれ思案投げ首のあげくやっぱり思いきれずに、再びその店を訪れた。ピノー氏が以前にましてにこやかな顔つきで私を迎えたのは言うまでもない。妻の身にカルティエのダイヤが付けられていないのも言うまでもない。結局私はその17冊を言い値通りで買わされることになった。30年間のパリ往来の中で、言い値通りでパリの古本屋で購入したのはこれが初めての屈辱的な経験だった。といって必ずしも馬鹿なことをしたとは思わない。こういう本は出会いもので、次の機会がまたとあろうとは思われないからだ。言い値よりも安い値段のものがまた出る可能性は十分あるにしても、それがいつになるやら。私の死後に訪れても仕方のないことだし、明日に見つかっても、一日だけ早くその本を撫でることができた楽しみは大きい。(いささか負け惜しみの感がないではないが)

江戸の第一の文人太田南畝は貧しい下級武士ながら、ひたすら購書と筆写に明け暮れた(もちろん酒も女性も楽しんだが)75年の生涯の最期、命も旦夕に迫った病床にあった時、なじみの古本屋が「舊唐書(ぐとうじょ)」全200冊を持ち込んだのを、大枚15両を払って買い取った快拳がある。(※)幸田露伴の名随筆「骨董」の枕に振られた話に、大阪の金満家が茶道に凝り、道具に凝って、長年垂涎の茶器を古道具屋が運んできたが、それが目の玉の飛び出るほどの値段、ところが彼は喜んでそれを買った。ところが数日後に病に伏せていた彼が亡くなったために、世の人は一日ン万円(明治の頃の話である)の楽しみと計算して富人の道楽を笑ったそうだが、露伴は骨董の魅力は凡俗の金銭を論じる卑しさを超えているとして、笑った人々を戒めている。(これらは妻を説得する時に必ず引用する有難い一節である。)

こうしてこの全17冊は帰国の旅行鞆のほとんど全部を満たすことになった。パリの友人へのお土産を詰めて持ってきた旅行かばんは、かくして本の搬送用のカバンと変身したのだった。(そしてまたまた結局のところ、不思議にも1年の思案投げ首を経たのちに、ピノー氏の手にはひらひらと翻った『マダム・ボヴァリー』の1856年の初版2冊も、カル

ティエのダイヤモンドの代わりにフロベールを専門とする妻の所有するところとなった。しかし誤解のないように申し添えるが、これらの本は、決してカルティエのダイヤモンドの価格と等しいはずはない。はるかに低廉である。およそ古書籍というのは、日本の江戸時代から以前の書物はともかく、19世紀あたりのフランスの古書は、実はそれほど高くないのだ。よほど高いものでも20万（これは一冊であつたり、全集数十冊一セットのばあいを含める）を超えるものはほとんどない、と言ってよい。著者の署名が書かれている、とか限定20部のうち、というのなら多少違うけれど。だから変なものにお金を使うより、書籍を買った方が、どれだけ趣味を高めることになるかわからない。（あれ？どうやら私はピノー氏に洗脳されてしまったのか？）

この全集を手にして感じ入ったのは、先にも述べたドーミエやその他当時の挿絵画家の傑作が、見事な彫の木口版画師の手によって、摺り師の手によって、見事にくっきりと浮かび上がるように印刷されていることだ。先の連載で述べたように、この全集を復刻した1965年からのビブリオフィル・ド・ロリジナル版があるが、そこに収録されている挿絵の復刻と比べると、その鮮やかさの差は歴然だ。当時の印刷技術の確かさにも驚くことができるが、それも実物に接することができたゆえである。



(図版参照7 左：フルヌ 版、右：バルザック『人間喜劇』フルヌ版1968年復刻版)

ただし写真を撮った腕前が拙なので、原版の良さがうまく出ていないかも知れない。この版の挿絵に比べると、前回紹介した神戸女学院所蔵のウシオー版『バルザック全集』全20巻（1855年）の挿絵も、結局は当時の復刻版なので、画像の鮮明さは原版に劣ることは否めない。

しかし、ウシオー版『バルザック全集』の造本や予約出版の成功からわかるように、19世紀の前半には、まだまだ高価だった書籍はようやく大衆化路線を走るようになる。いわゆる貸本屋が1830年代から隆盛を極め、いわゆるバルザックやウジェーヌ・シューといった大衆小説家の作品がパリ市内にたくさん設けられたキャピネ・ド・レクチュール

で多くの人々の人気をさらった。(この公設的な貸本屋については表題の全集の説明をしたのちに、神戸女学院図書館が架蔵する一冊の研究書を紹介しようと思っている。)ようやく中級、下級のブルジョワたちが文字を知り、読書の楽しみを知ったのである。そしてそれを後押しする出版業の隆盛が1850年代から多くの大衆本を生むことになった。

今回はウシオー版『バルザック全集』全20巻(1855年)発刊からちょうど100年を経て新たに発刊された神戸女学院所蔵のクリュブ・ド・ロネットンム版『バルザック全集』全28巻(1955年)にいたるまでの種々のバルザック全集について紹介してみることにする。

* * * * *

(※) 南畝が集めた本は子、孫の代までにことごとく散逸し、それを後代の愛書家がそれぞれまた南畝の蔵書として集め直したり、秘蔵したりしている。バルザック研究の大家ソルボンヌ大学教授のジョルジュ・カステックスは愛書家、蒐書家として知られているが、彼の死後数年して、私がいわゆるブラッサンス広場で毎週土日に行われる古本市で数多くの彼の蔵書票のついたバルザック関係の珍本を発見して、何冊か、それこそ大いに値引きの腕を発揮して購入したが、その本屋はパリの本屋ではなく、アラス(例のシラノ・ド・ベルジュラックが美男のクリスチャンとともに奮戦した北フランスの町)から来たということだった。その購入の際に私としては痛恨の出来事がある。同じバルザック研究の友人を翌日の日曜日に案内して、カステックスの蔵書のうち、私がすでに持っていて彼女が持っていない1839年版の挿絵画家トニー・ショアノの挿絵が入っている豪華本『あら皮』の版を、彼女のためにさらに値切って手に入れてあげたが、実はその本は、同じ版でも、希少な特別の挿絵が扉にさらに一枚加わっている稀覯本で、買ったその場で開いてそのことに気づいたが、今更僕のものにしたい、ということもできず、今は安らかに彼女の書棚に眠っているはずである。しかし今このことを述べるのはその憾みを言うためではなく、蔵書の運命のはかなさを説くために他ならない。私の僅少の蔵書も死後どこをさまようのであろうか。